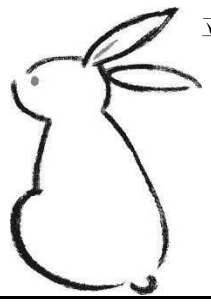
平川塾ニュースレターNo.９

2023年12月15日発行

〒558-0003　大阪市住吉区長居３－３－２５
メゾン住吉壱番館　１階－５
平川塾　06-6695-0181

Shiro-usagi

白兎・素兎



平川塾HP　アメブロ　YouTube

文責：平川　達三

古文とバッハ

今は昔。
20年以上も前のことです。

メルセデスベンツのパンフレットだったと思うのですが、京都のとある寺と思しき裏の通りに、さり気なく当時のＣクラスのクルマが留められている写真が載せられているのです。

ひっそりとした未舗装の小径の寺の古びた土塀に寄り添うように留められた車体の上に、赤い紅葉の葉が数枚乗っていて、小径にはたくさんの紅葉の枯れ葉が落ちているという、晩秋を思わせるものでした。

ベンツといえば、最近でこそ世界の名車という冠がおぼろげになりかけていますけれど、特にアジア圏では今なお高級ブランドとしての地位を保ち続けています。

ドイツ車といえば、ベンツ・BMW・アウディ・フォルクスワーゲン・オペルとなるでしょうか。

考えてみれば、妙な取り合わせなのです。

というのも、日本の伝統的な風景の中に誇り高いドイツ人の象徴のようなクルマがちゃっかりと存在するのです。

しかし、晩秋の京都の小径のもとで土塀とベンツというクルマが決して仲良く写っているのではなくて（残念ながら、手元にそのパンフレットもなく、ネットで検索してもその写真は出て来ませんが）、物静かではあるけれど明確に拮抗させるように主張し合ってはいるものの、決して騒々しくなくてあくまでも上品なたたずまいを醸し出すその写真に、プロの写真家の感性をじゅうぶんに感じさせ、それを楽しませてくれるものでした。

ちょうどこの頃、光岡自動車が世界のデザイナーの度肝を抜くような強烈なデザインのクルマを発表しました。

オロチ

風の声なので真偽は定かではないのですが、「オロチ」のデザインを見たフェラーリのデザイナーに

「駕籠（かご）かき文化の日本人に、こんなデザインを考えられるヤツがいるのか？」

と、地団駄を踏ませたそうな。

ヤマタノオロチから発想を得たそうです。こちらもネット上に存在しないようですが、某神社の前にオロチが見る側に向けられた恰好で留められている写真でした。

オロチのデザイナーは1975年栃木県生まれの青木孝憲氏です。当時24歳くらいだったそうですが、直談判に近いかたちで光岡自動車に入社し、その後も個性的なクルマを次々に送り出している気鋭の存在です。

『古事記』の中に伝えられるヤマタノオロチはあくまでも想像の怪物で実在しませんから、「本当の姿」は誰も知らないわけです。それでも、もし実際に現れたとしたらこんな感じなのだろうというのを彷彿とさせるような、ちょっとおどろおどろしい顔つきとその独特のスタイルは、これを公道で走らせたときには、クルマに関心のない人でさえも振り向かせてしまうほどの強烈なインパクトを持っています。

ところが、そのオロチと神社の取り合わせに、何とも言えない違和感を覚えたのです。

ドイツ人と日本人とでは勤勉さという点ではどこかに共通点が見出せそうだとはいえ、語族としてもですが、京都や奈良のみならず神社仏閣は日本の伝統の典型であり、堅牢な石造りやステンドグラスに象徴されるような教会をもつドイツとでは、文化においても大きく異なっています。

ですから、１枚の写真の中で互いを尊重しあいながらもどこかで拮抗していて、互いの相容れないところをはっきりと表しているのは、当然のことといえるでしょう。

でも、その差異が言語化できない違和感よりも、むしろちょっと気持ちの良いわずかな痛みを伴った心地よさを見る者に与える土塀とベンツの写真に対して、オロチと神社の写真の方は居心地の良くない違和感があるのです。

ヤマタノオロチも神社も日本の精神部分では大きな共通点があるはずです。ところが、そこからインスピレーションを得たはずのデザインが示す主張と神社の主張とが、同調も拮抗もせずにてんであらぬ方を向いているようで、とってつけたような印象を受けたのです。

これはおそらく、古寺の土塀もベンツにも、もちろん神社もオロチにも原因があるのではなくて、感性に起因するのだろうと思います。

プロの写真家のすごさは、私たちが何気なく見ている光景ゆえに見過ごしてしまう瞬間に気づき、その一瞬をファインダーに捉えることです。その絶妙さを私たちは感嘆し称賛するのです。

パンフレットへの掲載目的のための撮影や自社アピールのための撮影など、それぞれの目的で写真家に依頼されての結果なので、そういう事情を知らぬ見る側の一方的なこととはいえ、ベンツとオロチの写真から醸し出されるものの違いは、写真家の感性だけでなくてそれぞれの会社から依頼された内容にもよるでしょう。そういう意味では、写真を撮る側ではなくて、撮られた何枚もの写真から、目的にふさわしいと判断して選び出す側のそれぞれの感性の違いが表れているのかもしれません。

お話は大きく変わりますが、ワタシの塾の生徒さん、特に中高生君たちに正直に答えてくださいねと断った上で、こんなことを尋ねてみたのです。

「古文はキライですか？」

「古文は好きですか？」ではなくて、問う前から「キライですか？」とな？

まあ、おおかたの答は予測してますのでね（笑）

はい。その予想通り、全員が「キライです」と即答しました。中には「大キライです」とも。

実は、ワタシもキライでした。ワタシの場合は、古代日本語としての古典も音楽の古典も、両方でした。

古代日本語としての古典は、いわゆる古事記や日本書紀や万葉集に始まり、『枕草子』『源氏物語』『平家物語』それに添えて『徒然草』･･･。

挙げればキリがない･･･（苦笑）

一方の音楽ですが、一応、音大を無事に卒業できて、しかもしばらくは学校の教師をしながらピアノ弾きもしていました。

音楽で言うところの古典は、18世紀から19世紀にかけてのヨーロッパにおける音楽の総称です。ベートーヴェンやシューベルトなどに代表されるアーティストが活躍した時代を古典派音楽の時代といいますが、もう少し時代をさかのぼった17世紀のバロック音楽の時代も含めると、そこにはヨハン・ゼバスティアン・バッハという、「音楽の父」が表れます。いわゆる、古典派の中の古典音楽です。

その一方で、日本の国語学でいうところの古典は、それこそ『古事記』から始まるのですが、もう少し時代を進めて、『枕草子』が完成したといわれている1001年頃といえば11世紀頃のことになるので、音楽でいうところの古典派といわれる時代とはかなりの「時差」があります。

音楽にお於ける古典（以後「古典」）、特にその最たる存在であるバッハの作品の素晴らしさにワタシが気づいたのは、40歳を越えてからです。

それまではというと、「古典＝難しい・カタイ・不自由」というイメージかありませんでした。というのは、とにかく、ものすごく厳格だからです。テンポひとつをとっても勝手に変えてはならないし、楽譜通りに弾くのは鉄則中の鉄則です。ですから、ガーシュウィンのような近代的な作品が大好きでした。

もっとも、ガーシュウィンをして自由すぎるゆえの不自由さをこれでもかと痛感させられ、その痛みゆえに、厳格であるはずの最たる古典であるバッハの作品に戻るきっかけとなるのです。

ニンゲン様というのはマコト厄介なヤツでして、「自由にしてイイよ」と言われれば、何をどこまで自由で良いのやら分からなくなり、逆に「あれもダメ、これもダメ」と言われれば、自由にさせよとほざく。

生徒さんの「古文キライです」という感情をを、はて、どのようにしてを和らげようか･･･。

なんてことを考えながら、偶然とはいえバッハの『平均律曲集』のCDを手持ちのプレーヤーで聴いてみる。

目には清少納言の『枕草子』。耳にはバッハの『平均律曲集』。

おいしいコーヒーとほどよいビターなチョコレートの取り合わせ以上によく合うのです。

あれ？
この取り合わせ、この感覚･･･。

そうそう。あのベンツと土塀の写真を見たときとよく似てるいような･･･？

民族も文化も、もちろん歴史も違うのに、「伝統」という文字には言葉を超えた、天空でのみ通じ合うような特別な存在があるのかも知れません。

実入りのない精神論ではなくて･･･ 2

「先生、やっぱり古文はキライです」
　どうやったら好きになれますか？」

最近、高校生君から投げかけられた質問です。

「キライきらいも好きのうち」

好きであろうがキライであろうが。対象物に関心があるから言えること。もしあなたが本当に関わりたくないのであれば無視を決め込むのがイチバンです。が、それが勉強となると、テストという学生さんにとっては忌むべき存在があり、おまけにテストの結果までついてくるという厄介なことを避けては通れない限り、無関心ではいられないというジレンマが起こります。

だからといって、今は昔の英会話教室のコマーシャルではないですが、「発音は気合いで！」ならぬ「古文は気合いで！」ではね･･･。

「『キライナモノハキライ』からの発想」というアメブロ記事では、英語がきらいな中学２年生からの質問として書いた記事をこのニュースレターに貼り付けて加筆しているのですが、英語にしても古文にしても、結局は同じことです。

実は、答はめっちゃ簡単なんです。それは･･･

好きになれないものは、なれない。なれないなら、無理になる必要もない。

もう、身も蓋（ふた）もない答です。でも、これで正しい･･･はず？

だって、ワタシがそうだからです。

小学生の頃、鈍くさいからと、運動のできる子にずっといじめられたから、スポーツが好きになれない人になってしまいました。

まあ、そのいじめに対して反旗を翻す気力が起こらなかったこの自分にも責任は大いにあります。
（これ今だから言えることですけれど）

で、６年生になって音楽の道に入り、そうしたら得意なことが出来たので、ずっといじめていたヤツらが手のひらを返したように音楽のことを聞きに来たけれど、一切教えてやらなかった。

（*What a narrow-minded guy !*
なんて心の狭いヤツなんだ！）

By Google AI

なぜなら、人間の身勝手さが分かり、人間不信になったからです。

そういう感覚をずっと持ち続けていて、自分も身勝手なニンゲン様のひとりだということに気づき、そんな自分をやっと受け入れられるようになったのが55歳くらいからです。

キライナモノハキライ。
きらいなモノは好きになれない。

でも、何かをきっかけに好きになることはあるかもしれない。それはそれで良し。

こういうスタンスでいられるようになってから随分と楽になりました。

そういう経緯があるので、

「好きになれないものは、なれない。
　なれないなら、無理になる必要もない。」

でも、これだとあまりにもカタクナで人間的に発展できないので、

「好きにはなれなくても、研究材料として、個人の感情は入れずに論理的に見れば良い」

という割り切る方法を生徒さんに教えています。

とはいうものの、頭では理解できそうに思えても、どうもストンと心の中に落ちません。

そこれ、生徒さんにはこのように伝えています。

「好き」と「得意」は違う。

「好き」の場合は、「好きこそものの上手なれ」の反面に「下手の横（もの）好き」という言い回しがあります。

「下手の～」のほうはへりくだるという側面もありますが、「好き」は必ずしも「上手だ」とか「上手でなければならない」なんてことはないのです。

「好き＝上手｝なんて、いつの間にか勝手に結びつけられたに過ぎない。そういう発想です。

例えば、英語が得意な子に

「あなたは英語が好きなんでしょ？」

と尋ねて、

「そんなことないよ」

なんていう答を返されたらビックリはするけれど、とにかく勉強を頑張って成績を上げなきゃとひたすら思っているだけだったら、「英語が好き」に直結させることはできません。でも、英語の成績は良いのだから「英語は得意」ではあるのです。そういう考え方をすれば、「英語がキライ」なあなたでも少しは楽になるでしょ？

というお話をその生徒さんにしました。

しかしながら、これはただの精神論。絵に描いた餅ですから実入り感は限りなくゼロに近い。そんなことより、英語とか古文を得意になる方法を教えてくれたほうが、よほどに実入りが良いわけです。

ぼやけているものをクリアにする

現在中学２年生の生徒さんの、ある一言が「もしかしたら？」と思うきっかけになりました。

「分かったら面白いかも？」

失礼ながら、こういうことを発するとは思えないタイプの生徒さんからの言葉だったので本当に驚かされました。

というのは、論理的な理解がやや苦手で、事あるごとに発するある口癖があったからです。

「どう？　めっちゃシンプルやろ？」

「ええ～？　めっちゃムズい～。」

「ホンマ、お勉強のメンタル弱いよなぁ～。」

「ああ～、アタマ疲れたぁ～。」

こう言っては机に突っ伏しるのです。

だから、てっきり「勉強はキライ」という想いを持っているものだと思っていたのです。

ところが、

「分かったら面白いかも？」

という発言を耳にして、本当に「人は見かけによらずもの」なのだなと実感させられると共に、新たなことをこの生徒さんから引き出せれば、解決への布石を打てるかもしれないと思いました。

私たちがストレスを感じる場合は十人十色とはいえ、物事の状態がはっきりとしないときは、ほぼ共通するようにストレスを感じさせられるのではないでしょうか。

例えば、的を射ない発言に対して結局何を言いたいのかがぼやけていて分からないとき、音が小さくて聞き取りにくい、画像がぼやけていて何が写されているのか分からない･･･。

つまり、対象物がぼやけているときに強いストレスを感じるということは人に共通した感情の動きではないかというものです。

それを小学生時代のこの生徒さんに当てはめてみると、こんな感じになるのではないかと思ったのです。

というのは、かなりなやんちゃさんだったようで、いわゆるイマドキに珍しい「きかん坊」さんですね。

「利かん坊」とも「聞かん坊」とも書くそうですが、読んで字のごとく、言い出したら人の言うことなんぞ聞き入れないという性質を持つ子どもさんのことです。

拙著『塾ごっこ』の「きかん坊」でも書いているのですが、ワタシは黙した「きかん坊」でした。黙って言うことを聞かないのです。まるでマハトマ・ガンジーの非暴力不服従みたいでした。

言葉に発して反抗せずに黙って二の句が継げないようなことをして、特にちょっと高圧的な親父様をして

「こいつは何を考えているか分からんヤツ。容易ならざるヤツ。この頑固さは誰に似たんだ？」

と言わしめていました。

一方のこの生徒さんは、当時のワタシとは真逆にいるような感じで、もし同年齢で同じクラスにその子とワタシがいたとしたら、めちゃくちゃ馬が合ったか、逆に犬猿の仲だったかのどちらかでしょう。

そんな感じだったので、学校の先生からは注目の的といえば聞こえは良いですが、いわゆる手を焼かせる子としては第一人者のような存在だったそうです。

ですから、本来なら授業で教えてもらって理解しておかねばならない部分がぼやけまくっていて、そのままでずっと来ていたことが原因で、ワタシの塾に来たときには、以前に通っていたという塾での記憶がほとんどない状態でした。

そんな「手着かず」の状態なので、本を読んでも分からない、算数も国語も理解度は４割ほどに留まっている状態で、実はこの状態は、勉強が嫌いで端（はな）から勉強を放り投げている子に似ていたのですが、大きく異なっていたのは先の塾での記憶がない分先入観がなく、勉強への意志の火種がまだ消えていなかったことでした。

この状態を解決してゆくには、ふたつしか方法がありません。それは、この生徒さんをリスペクトすることと、とにかく対話をすることです。

勉強対する理解度が４割くらいだったので、本来ならしないような質問を投げかけてくるし、人の話半分でトンチンカンな答えを出すのですけれど、それを全部受けとめて、ひとつずつ丁寧に答えていったのです。

このときに大切なのは、説教はしないことです。説教は一見するとその子のためを思っているようですが、その子の言うことを否定するからこそ説教となるのです。つまり、説教とはタイミングによっては相手の否定につながります。だから、説教はしない。

「分かったら面白いかも？」

この発言は、このようなやり取りの中で、この生徒さんから不意に飛び出したものでした。

何でもそうですが、考えたことよりも考えないで発したり行動したときに思わぬ良き方向に向かうことは、往々にしてあるものです。

まさに偶然は偶然に非ず。

そこから古文の発想につながるのには２年ほどかかるのですが、その発想の根幹にあるのはこれでした。

「ぼやけている。」

高校生君の古文を指導していて、高校生君ほどには古文に深く脚を突っ込まない範囲ではあるけれど、一部分を中学生の古文に取り入れてみたらどうなるのだろうかというところにたどり着きました。

それは、ある中学３年生の生徒さんから、

「五ツ木の模擬テストで古文が分からなかった。」

というレスキュー要請があったことがきっかけでした。

それで、中学生で学ぶ古文について、教科書ではどのようになっているのかを改めて念入りに調べてみたのです。

中学１年生で学習するのは『枕草子』の「春はあけぼの」と『竹取物語』の竹取の翁（おきな）とかぐや姫が出会うシーンと、かぐや姫が月に帰って行くシーン。

中学２年生では『枕草子』の「うつくしきもの」・『徒然草』の序段・五十二段の「仁和寺の僧」・第九十二段の「ある人、弓射ることをを習ふに」、そして『平家物語』の「扇の的」または「敦盛の最期」です。更に漢文の基礎として五言絶句・七言絶句・五言律詩・七言律詩で日本でもよく知られている杜甫・李白・孟浩然の作品、いわゆる漢詩を学びます。

中学３年生になると、『おくの細道』と和歌の世界を学び、漢文の基礎として『論語』を学びます。

こうやって見ると、古文や漢文のいわゆる古典の作品に接する機会が、かなりな数で用意されているのが分かります。

さて、これらについて、一体どこがどんな風に「ぼやけているの」のかに論を進めていきます。

その前に、古文に関しては、中学生の指導要領に「壁」があるのです。それは、古文の文法事項について高校の指導事項には足を踏み入れないことなのです。こういう背景があるため、中学生で学ぶ古文の文法事項は「係り結び」しかありません。

その代わり（ワタシには苦肉の策にしか見えないのですが）、現代語訳文が添えられています。

つまり、初見の古文の原文を現代語訳文と照らし合わせながら、大まかにイメージを捉えさせようというワケです。

実はここがクセモノなのです。

「大まかに捉えましょう」とな？

どこからどこまでが「大まか」で、どこからが「細かく」なの？

まずここがぼやけています。

そして８割から９割までの生徒さんが現代語訳と照らし合わせながら、といっても、ほとんど無意識に先生の解説を聞き流し現代語訳をサラリと見通して、それで終わりです。

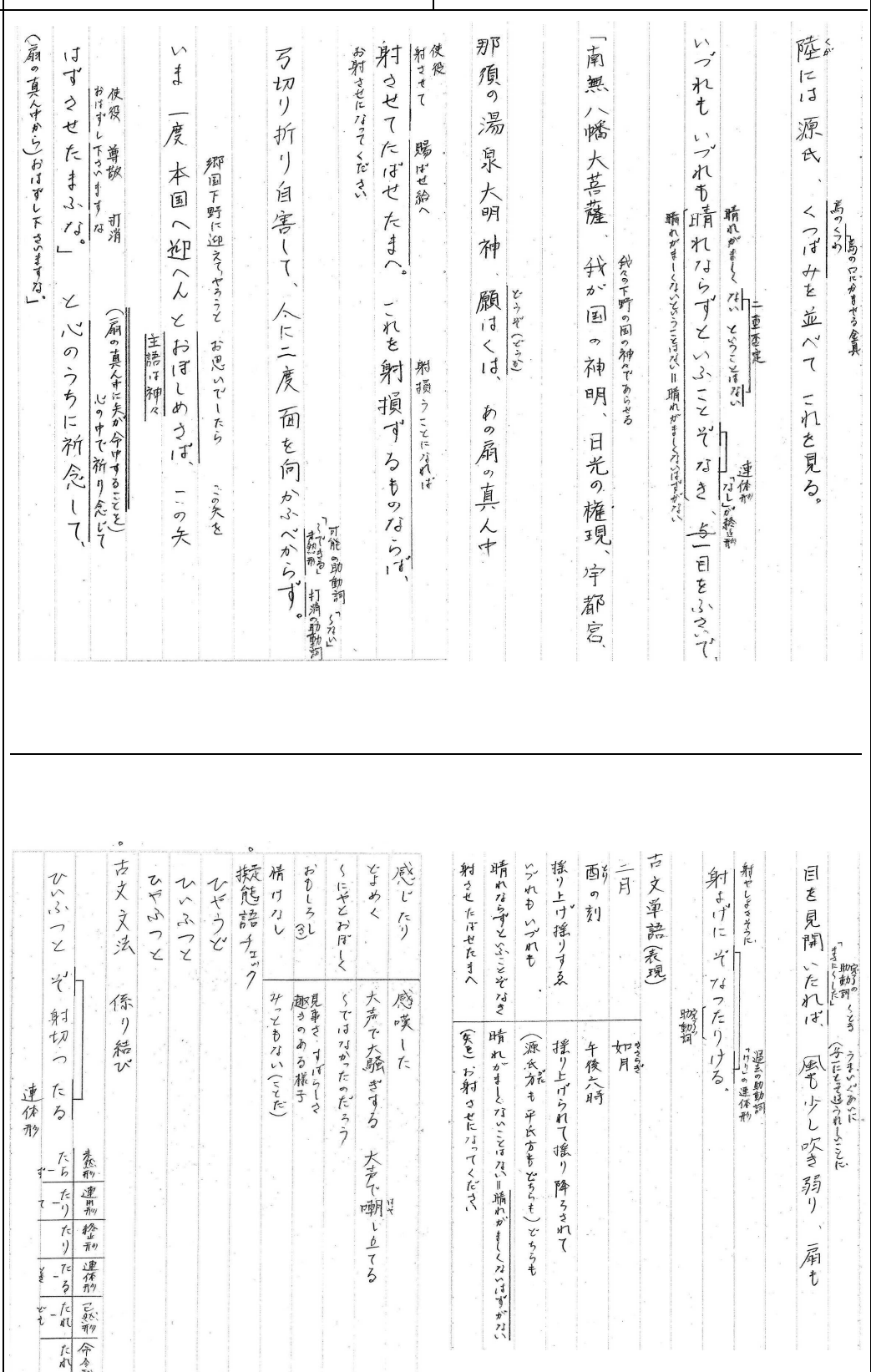
こんなぼやけたことをしているのです。この状態で「五ツ木」の難解な模擬テストを受けて高校入試を受験するのです。

こんなの、全くもって論理的ではない。つまり、指導者の力量に丸投げされているのと同じ。国語力が大事だと言いながら、英語と数学に躍起になり根幹の国語については二の次三の次という文科省の本音が表れています。

ワタシは幼い頃から黙して従わない性質をもっている「きかん坊」ですから、ここで本来持ち合わせている静かな反抗精神がわき上がって来ないはずがありません。

ということで、まずは私立中学校の生徒（２年生）さんと中学３年生の生徒さんに中間考査で試してみたのです。

それが、この画像です。



いわゆる、文法解析を少しだけ取り入れて、ただし、中学生なので覚えなくても良いという条件付きの指導です。

ターゲットは「けり」と「たり」。

中学生唯一の古文の文法事項である「係り結び」の絡みで、この２つの助動詞は必ず姿を現します。なので、どのように語形が変化するか（活用するか）については、覚えなくても良いけれど、どういうものなのかは体験しておいて欲しいと思ったのですね。

そして、押さえておくと良い古文単語です。代表的な例として「うつくしき」というシク活用の形容詞です。

『竹取物語』であれば、「いと　うつくしゅうて　ゐたり」です。

① 「いと＝大変・たいそう」
② 「うつくしゅうて＝かわいらしい姿で」
③ 「ゐたり＝座っていた」

特に③の「ゐ」という文字ですが、「いる」であれば、単に「そこにいる（存在する）」という意味ですが、「ゐる」となると「座っている」という意味になります。また「たり」は完了や過去を示す助動詞だということを知っていれば、現代語訳を見ずとも、

「たいそうかわいらしい姿で座っていた」

という現代語訳が自力で出来てしまいます。

現代語訳文と照らし合わせながら、「ああ、こういう意味なんだな」というとらえ方と、自力で現代語訳をできるのとでは、外部の模擬テストや入試となれば、圧倒的な差が生まれますし、そもそもよりクリアに意味を捉えることができます。

高校古文の文法に深く立ち入るのではなくて、ちょっとだけでも踏み入れただけで、これだけの差がつくのです。

「これが自分で勉強するということです。もっとも、古文の文法を学習していないので、自力で分析せよというのめちゃくちゃな要求なので、それはボクがします。でも、いずれは（高校生になれば）、ごく当たり前のようにできなくちゃいけなくなるから、早いうちに少しずつ体験しておけばイイよね。」

というように、授業時には伝えています。

その結果ですが、五ツ木の模擬テストで周囲の子は「古文は何が書かれていたのかをつかめなかった」という中で、「９割方、意味を把握できた」という答が返ってきましたし、私立中学校の２年生の生徒さんに至っては、書かれている内容がものすごくクリアになったと言いました。

幸先の良いスタートを切れたので、「分かったら面白いかも？」と言った例の生徒さんを筆頭に、他の中学生さんにも同じように、期末テスト前に解説をしました。

『平家物語』と『徒然草』が範囲内の古文事項です。相手にとって不足はありません。とはいうものの、この２作品の中で、最も分かりやすい段なのですけれど、中学生さんにとっては巨大な「壁」にみえているのは間違いありません。

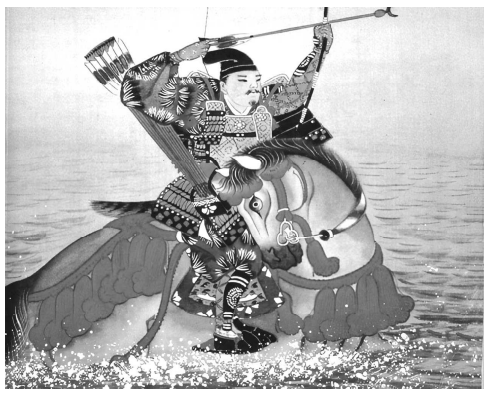
例によって、「古文、ムズい～！」と事あるごとに嘆いておりましたが、そこは根気よく進めていくうちに、

「あ、そういうことか！」となり、

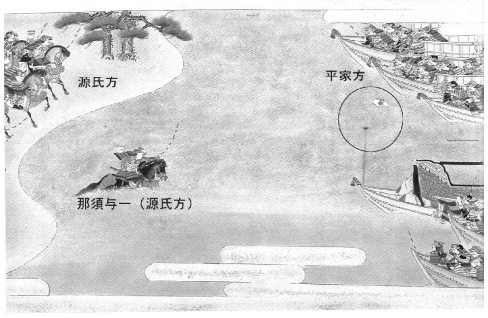
「古文ってこうやって説明してもらったらオモロイかも？」

とまで言うようになりました。

ただし、これはあくまでも一時の感情です。これを「古文が得意です」と生徒さんに言わせるのは、まだまだ先の話です。



那須与一　この段ではこの人が主役、つまりヒーローです。



『平家物語』の「扇の的」の授業で平家方と源氏方のシチュエーションを解説する際に使った図。

『推しの子』

「これ、君ら歌えるのん？」
「歌えるよ！」

Youtubeをまさぐっていて、とくにTikTok動画のBGMで最近やたらと耳にする曲があります。

なんでも、『推しの子』というアニメのオープニングソング（アニソン）らしいのですが･･･

歌詞の複雑さといい、調性の不安定さといい、とにかく、このめまぐるしい変化に着いていくだけでも精一杯なワタシ。

ワタシ、実は歌詞を覚えられないのです。認識しようという気持ちが湧かないというのが正確な表現です。歌詞よりもその曲の構造とか和声進行、いわゆる曲作りとか音作りの方に文字通り耳を傾けてしまうのです。

この『アイドル』について言いますと、和音の構成とかメロディの進行はポップスの中では古典的に聞こえるのですが、調性の半音移調を繰り返すので、その不安定さは何を意味するのかなと考えながら、動画に現れる歌詞を見ては頭の中で曲を分解させてみると、なるほどなと思いました。

アイドルの日の当たる部分と闇の部分を歌詞の中の主役が日々行き来している様子をメロディー付きの部分とラップの部分を繰り返し、そのラップの部分でさえ半音上行させながら、歌詞の文字量を増やして聞き手を追い込んでいくという手法が使われたかと思うと、サッと曲想を変化させる瞬間に半音下降（上行）させて転調させる。

ワタシはこっちの方に意識が引っ張られるので歌詞が全く認識できません。動画内に歌詞が現れるので、どうにか認識している状態です。

専門的な小難しいことはここまでにしまして･･･

「ずんだもん」という面白いキャラクターがいるのですね。

TikuTok動画内でこのキャラに、『アイドル』のメロディに乗せて都道府県を全部当てはめて歌わせたり、数の桁を歌わせたり･･･。

ずんだもん
「桁」バージョン

ずんだもん　都道府県バージョン

『推しの子』テーマソング
『アイドル』ピアノバージョン

枝豆の妖精　ずんだもん

以前、『エヴァンゲリオン』のテーマ曲だった『残酷な天子のテーゼ』ですら、初めて耳にしたときは、

「なんじゃ、これ？　この慌ただしい曲は？　これ、歌えるの？」

と思っていたのですが、高校生のカラオケでは定番級のアニソンなんだと聞いて、高校生の認識能力と歌唱能力の高さにビックリさせられたものです。

ところが、セカオワさんの『Habit』の速さに驚かされ、今は『アイドル』に驚愕させられて、ふと思い出したように『残酷な天子のテーゼ』を聞くと、ナンと遅く聞こえることか･･･。

日本のアニソンは世界最先端を走っているそうです。

いつの時代でも、その時代の音楽を牽引するべく最新鋭の曲作りがなされてきたのが日本のアニソンの歴史です。

アニソンで最新鋭の感覚を発表し、それが認知を得たあとで歌謡曲をはじめポップスに反映される。これが昭和時代の流れだったように記憶しています。

それが平成に入ると、アニソンという特別な立ち位置ではなくて、ポップスで最先端を行くアーティストにアニメのイメージを伝えて曲作りをする場合と、そのアニメのイメージに近い曲がアニソンに採用されることでアーティストが世に出される場合とに、はっきりと分かれる流れができてきたように感じます。

今日、生徒さんに
「オジサンの知らないところで時代は進んでいるんやなぁ･･･」
と思わず言ってしまいました。

何にしても、なんたって音楽です。

〈編集後記〉

お陰様で、この11月20日に、amazonサイトにリリースされました。拙著『塾ごっこ』です。塾生の皆様には１冊ずつではありますが、プレゼントをさせていただきました。１年と４か月かかってやっこらさで脱稿し、その後、出版社との表紙などの打ち合わせや最終点検などのを経て発刊されました。amazonのリリース・ページを初めて見たとき実感が全然湧くこともなく、まるで人事のようでした。

これから先、ニュースレターで裏話などを書かせていただければと考えています。

Amazonサイト